

キリスト教のユニークさの一つに、神様と私たちとの関係が、父と子の関係である、ということがあげられると思います。そこで今日は、父の日ということもありますので、そのことを心に留めつつ、みことばから聴いていきます。ご存知の方がほとんどだと思いますが、今日の箇所は、「放蕩息子の譬え話」として知られているところです。ただこのタイトルだと、どうしても放蕩息子にその焦点があてられてしまいます。でも、実際は、彼よりも、父親の方により焦点があてられるべきだと私は思います。なぜなら、この父の姿こそ、放蕩息子としての私たち罪人を赦し、子として受け入れて下さる父なる神様を表しているからです。

皆さんは、この譬え話を読んで、どこか気になるところがありますか？私にはいくつか疑問に思うところがあります。というのも、普通では考えられない、つまり、「あり得ない」と思うような点がいくつか記されているからです。それは、放蕩息子に関してもそうですし、また父親に関してもいうことができます。ただ、これは実話ではなく、譬え話です。ですから、そこには不透明というか、詳細が書かれてない部分もあり、その終わり方においても、どこか中途半端さのようなものが残ります。

では、主イエスは、この譬えを通して何を語っておられるのでしょうか？まずは放蕩息子の「ありえない」と思う点について見ます。そして、その後で、父親のそれについて見ます。11-12節「ある人に息子がふたりあった。12 弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。…」皆さん、あなたはこのように願った弟息子のことをどう思いますか？ここで彼が父親に求めたこと、それは一時的な金銭面での援助ではありません。また彼と兄との関係が良くないので、父の死後のことを心配し、自分に財産を残してくれるよう、つまり、遺言を書くよう頼んだというのでもないのです。彼は、父親がまだ生きてるのに、財産の自分の分け前をくれるように願いました。それは父の死を願ったも同然のことだったのです。

なぜ彼はそれを願ったのか？何をするために、その分け前が必要だったのでしょうか？13節「それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった」。彼が、そんな常識ではありえないことを願った理由、それは、遠くの国に行き、遊び放けるためでした。何ということでしょうか？彼の父親が、どのようにして財産を築きあげたかはわかりません。後で登場する兄息子が、畑から帰ってきたという点からして、畑仕事と何らかの関係があったことが伺えます。ということは、その財産は、苦勞の結果であったと言えるのです。でも、弟息子は、自分の分け前を受けると、それを湯水のように使ってしまった。

14-16節「何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起り、彼は食べるにも困り始めた。15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやっつて、豚の世話をさせた。16 彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった」。

財産を使いきってしまった彼は、何とか生き延びようと、ある人のもとに身を寄せます。すると、その人は、彼に豚の世話をさせるのです。ユダヤでは、豚は汚れた動物とされていますから、いくらそれが譬え話とはいえ、彼の置かれた状況が、いかにギリギリのものであったかが、ここから伝わってきます。もちろん、それは放蕩してお金を使ってしまった彼の責任で、自業自得です。

でも、そこで彼は我に返ったといえます。つまり、自分の罪を認め、父のもとに帰る決心をするのです。ただ、彼が父に対してしたことは、あり得ないことですから、以前のように子どもとして帰れる保証はどこにもありません。ですから、雇人の一人にしてもらうことを彼は願うのです。それでも、そんな非常識な者を、誰が雇いたいと思いますか？父が自分を雇人の一人にでもしてくれると考えたこと自体、そこには父親に対する甘えがあったのではないのでしょうか？そうすると、彼は最初から、父親がそのようにあわれみ深い人であることを知っていたのかも知れません。ただ、彼としては、お金をもらった時点で、何もかもまとめて家を出たわけですから、父親に合わせる顔などない、というのが本当のところでしょう。

私たち信仰者は、父なる神様が、罪人の悔い改めを喜ばれるのを知っています。それゆえに、彼がこのように自分の罪を自覚し、父のもとに帰る決心へと至ったことを、その最悪の状況の中でできる最善のことと言うで

しょう。そして、その通りなわけですが、では、そのようにして彼が自分の罪を自覚し、父のもとに帰る決心へと至れたのは、すべて彼自身から出たことですか？そうではありません。なぜなら、その他に、彼には生きるための選択肢が残されていなかったからです。

なぜそうなんでしょう？それは、その国に起こった大ききんが理由といえます。天から雨を降らせ、実りの季節を与えることで、私たちを喜びと恵みで満たしてくれるのは誰ですか？主なる神様です。ということは、大ききんが起こる場合、主はそれと無関係ではないのです。そのことを知ってか、彼は、「父に対して」だけでなく、「天に対して」も罪を犯したと言っています。いずれにしても、その国に大ききんが起こっていなかったら、どうでしょうか？たとえ、彼自身は破産していたとしても、その国に食べ物があったなら、彼に豚の世話以外の仕事があったなら、さらには、空腹な彼に食べる物を与えてくれる人がいたなら、それでも彼は父のもとに帰ったでしょうか？

私個人の意見としては、彼が父に対して行ったこと、それは容易に赦されるべきものではないので、彼は父のもとに帰る決心には至らなかったと思います。何とかそこでやり過ごすことを求めたと思うのです。ところが、その大ききんが彼にそんな選択肢を与えませんでした。それゆえに、彼は自分が生きるために、父のもとに帰る決心ができたのです。このことは、罪を自覚し、主に立ち返ったすべての人に共通していると思います。ですから、そのこと（つまり、悔い改め）さえも、「私が」ではなく、「主が」させて下さった、つまり、主のあわれみによると私たちはいべきです。

話を戻しますが、そのようにして、弟息子は、父のもとへと帰っていきます。ここからは、父親に関して、その「あり得ない」と思える点を見ていきます。この譬え話は、もともと弟息子の身勝手な願いからスタートしたわけですが、もし父親が、彼に財産を分けてあげなかったら、話はそこで終わりです。でも驚くことに、父親は、彼の願いをきいてあげるのです。なぜそうしたかはわかりません。この息子にして、この親という声が聞こえてきそうですが、そのあたりは掘り下げずに、先に行きたいと思います。

父親に関して「あり得ない」と思える点は、それだけではありません。先ほどの話の続きですが、家に帰って来る弟息子に対する父の対応も、実にあり得ないものでした。20節「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした」。なぜ父親は、まだ息子が遠くにいるのに気づいたのか？彼の帰りを待っていたからです。でもそこで、父親としては、その威厳を保つため、また世間体を考えて、息子のもとに行くのは待つべきでした。ところが、そんなことはお構いなしに、父親は、息子のところに走り寄り、彼を抱き、口づけしたのです。彼を見つけ、かわいそうに思ったからです。

ただユダヤにおいて、父の威厳はとても重要なものです。ですから、罪を犯した息子に対しては、いくら彼がボロボロの状態にあったとしても、自分の方から先にあわれみを示すなど、ましてや、走り寄るなどしてはいけない。なぜなら、それは常識を遥かに超えるものだったからです。その後、父親は、さらにあり得ないことをしもべたちに命じます。

22-24節「ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた」。

ここまで来たら、もう「親バカ」と言われても、おかしくないかもしれません。というのも、ボロボロの状態のわが子を見て、かわいそうに思うのは、親心ですが、かといって、いくら息子が進んで自分の罪を告白したからとて、その罪に対するさばきを何も行うことなく、子としての身分を彼に戻し、祝宴までするのは、あまりに早すぎるからです。当然、それに対して良く思わない人々は、まわりにいたことでしょう。この後、登場する兄息子のように、怒りを表わにする人もいたと思います。その怒りは、最初は、弟息子に対して向けられ、でもその後、それは正しいさばきを行わない父親に向けられると思うのです。残念ながら、この後もさばきは出てこず、その祝宴に腹を立てた兄息子と父親との会話で話は締めくくられます。

28-30 節「すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことはありません。30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』」。

父親の弟息子に対する、あり得ない対応、その受け入れは、弟に対しては、父のあわれみの豊かさを示すものとなりました。でも兄息子に対して、それは、罪に対してさばきを行わないだけでなく、祝宴までもって弟の帰還を喜ぶという、父の理不尽さを示すものとなったのです。こういうことがあって良いと思いますか？やはり罪人にはさばきを、正しい者には報いを、というのが理に叶ったことではないですか？では、そういう兄息子は、罪のない者だったのか？彼は、自分が長年父に仕え、その戒めを一度も破ったことはないと言いましたが、自分がそう主張したら、それは事実となるのでしょうか？言い方を変えると、彼は、自分に対する父の心、つまり、その愛を理解することで、その応答として、父に仕え、その戒めを守っていたのでしょうか？

父に対する彼の言葉からは、そのようには思えません。兄息子も、父の思いがわかっていなかったのです。だから、弟に対する父の寛大さ、そのあわれみを見た時、彼はそれを妬ましく思った。それは彼が、父親ではなく、父の持ち物、つまり、財産を求めていた、愛していたからです。ですから、結局、彼も弟息子と同様、自分のことしか考えていなかった、つまり、自己中心な者、罪人だったのです。そんな彼に、父親は、自分の心を明らかにします。

31-32 節「父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか』」。父の心、それは弟息子に対しても、兄息子に対しても、自分自身を与えること、それによって彼らとその愛を知り、自分とともに生きることを喜びとすることです。そのことを父親自身もまた、喜びとするゆえに、彼はさばきではなく、あわれみを示しました。

では、罪人に対するさばきは、その犯した罪に対するさばきは、なくても良いのですか？ここで父親が、弟息子には、自分の身をもって示したように、また兄息子には、ことばで示したように、主イエスもまた、私たち罪人には、さばきではなく、あわれみが必要であることを教えるために、ご自分がすべての人の罪を背負い、罪人の代表となることで、神様からさばきを受けて下さったのです。それが主イエスをして、進んで十字架の苦難の道を歩まれた理由、自分の命をささげて罪人のためにとりなしの死(贖い)の死を遂げられた理由です。

ですから、この放蕩息子の父親は、父なる神様であり、この方と一つであられる御子イエスのことといえます。主は、罪ある私たちを愛するゆえに、喜んで自身の持ち物を、いや、ご自身の命までも与えて下さったのです。自分のことしか考えない人、主を信じない者には、この父親の姿は愚かにしか見えません。でも、主の助けによって自分の罪深さに気づかされた者には、この父の愛にまさる大きな愛はないのです。この主の愛は、今日も私たちに向けられています。感謝して受け取る者に、主はご自身のことをさらに現し、その愛で満たして下さいます。